



1コンクールメンバーによる合奏風景。2楽譜を見つめる真剣な表情から向上心の高さが伝わってくる。3パートごとの基礎練習もみっちり。4男子部員も少しずつ増えている。5消毒、マスク着用(吹かない楽器のみ)、生徒同士の距離を取るなどコロナ対策も万全。

合奏中は音を外さないように全集中!



巻頭特集 佐伯市立鶴谷中学校 吹奏楽部

音づくりは、人づくり



練習中の表情は真剣そのものだが、休憩に入ると、一転、中学生らしい笑顔を見せ、おしゃべりに花が咲く。

上心が芽生え、技術を磨く。勉強との両立や、仲間との協力も必要だ。その全てが成長の糧となる。
生徒たちも「礼儀や努力することの大切さを学んだ」「人をまとめる力がついた」「周りを見て動けるようになった」など活動を通して自身の変化を感じている。

かけがえのない仲間と共に

部を代表して3年生4人、部長でチューバの河野未侑さん、副部長でバスクラリネットの金栗琉七さん、ホルンパートリーダーの中田美咲さん、パーカッションのパートリーダーの河野由菜さんに話を聞いた。
部長は「みんな個性的だから、まとめるのが大変。ぶつかり合うこともしょっちゅう」と笑うが、「仲間はどんな存在?」と尋ねると、それぞれから「支え合える存在」「困ったらいつでも助けてくれる」「ライバルでもあ

今回は鶴谷中学校吹奏楽部の皆さんに密着! 練習に打ち込む部員たちの姿や、先生の熱い想いを通して、「コロナ禍でもひたむきにがんばる部活生たちの今」をご紹介します。

伝統ある吹奏楽部

鶴谷中学校吹奏楽部は、長い歴史と伝統を持ち、吹奏楽コンクール中学校の部において、1984年九州大会出場、1989年全国大会出場、1990年から3年連続九州大会出場など数々の実績を誇る、大分県の古豪といえる存在。近年は県代表に「あと一歩」のところで足踏みしているが、2018年、2019年と2年連続金賞を受賞するなど、着実に力を伸ばしている。



顧問 大谷 輝美子 先生

顧問は大谷輝美子先生。4月に赴任したばかりで鶴谷中学校での指導歴は浅いが、同校吹奏楽部出身であり、20代頃に同部の顧問を務めた経験を持つなど縁は深い。やさしい雰囲気とは裏腹に、その指導はパワフルで情熱的。部が受け継いできた伝統を大切にしつつ、「子ども達にさらに高いレベルのステージを体験させてあげ

たい」と、毎週末外部講師を呼ぶなど、新たな可能性を模索している。

人づくりが響きのある豊かな音を生む

大谷先生が指導人生の中で一貫して力を注いでいるのが人づくり。「あいさつをする、靴を揃える、勉強をがんばる、感謝をする、思いやりの心を持つ。人としてのあり方が音に出るんです。技術だけでは、私たちが目指している響きのある豊かな音はつくれません」。

人づくりを最初に意識したのは吹奏楽部顧問になってはじめて足を運んだ全国大会。トップレベルの実力を持つ学校の生徒たちの所作、整然とした演奏準備などに「人としての成熟度を感じ、衝撃を受けたという。」「人づくりの部分は、気づいたら口にするようにしています。口うるさいと思われているかもしれませんが、それでも生徒たちは3年間で見違えるように成長してくれます」。

逆風を力に変えて

コロナ禍ではコンクール以外の活動も制限された。通常であれば参加する地域行事や、学校行事も中止。昨年は練習すらできない日々が続いた。しかし、大谷先生は「全てをマイナスには捉えていません。昨年はお隣の城南中学校で教えていましたが、部活再開時には楽器を演奏する、みんなと合奏する...そんな当たり前のことがいかに素晴らしいことであるか改めて感じる事ができました。それはこの子達(鶴谷中学校の生徒)も同じはずです」と話す。その言葉は吹奏楽部員、ひいては部活に打ち込む学

ホルン 中田 美咲さん
明るいムードメーカー。観客から「ありがとう」といわれることが喜び。

チューバ 河野 未侑さん
責任感の強い、頼れるリーダー。部員や先生からの信頼も厚い。

パーカッション 河野 由菜さん
明るく表現力豊か。技術を磨き、みんなで合奏することが何より楽しい。

バスクラリネット 金栗 琉七さん
口数は少ないが、周りに気を配り、部長を補佐するしっかり者の副部長。



生たち全員に共通する思いだろう。最後に「子どもたちの才能は素晴らしい。可能性は無限大といつも感じています。3年間の活動を通して、音楽の魅力を知り、音楽が好きであり続けてほしいですね。目を細めて語った大谷先生からは、音楽、そして子どもたちへの深い愛情が伝わってきた。